

輪廻転生

川端と三島 山本壽夫

(一)

彼の四十五年の生涯が行き着き得た作品「豊饒の海」、この三島由紀夫の作品について川端康成は註一『豊饒の海』の第一巻「春の雪」、第二巻「奔馬」を通読して、私は奇蹟に打たれたやうに感動し、驚喜した。このやうな古今を貫く名作、比類を絶する傑作を成した三島君と私も同時代人である幸福を素直に祝福したい。あゝよかつた、ただただ思ふ。この作は西洋古典の骨脈にも通じるが、日本にはこれまででなくしかも深切な日本の作品で、日本語文の美彩も極致である。三島君の絢爛の才能は、この作で危険なまでの激情に純粹昇華してゐる。この新しい運命的な古典はおそらく国と時代と論評を越えて生きるであらう。と推賞した。豊饒の海全四巻は、三島の所謂註二「夢を主題としてゐて、夢と人生との重味はいずれがまさるかとも定めがたく」、「もし夢が現実に行先するものならば、われわれが現実と呼ぶもののが不確実であり、恒久不変の現実といふものが存在しないならば、転生のはうが自然であるといった考へ方で貫かれてゐる」浜松中納言物語に触発せられ、これに依拠し、しかもその物語の作者のやうな感傷的な放恣さをもつてではなく、宇宙全体を包みこむやうな思想体系を踏へて夢と転生の物語を書かうとしたのであり註三「自分個人だけでなく宇宙を包括する」「世界解釈の小説」を書かうとしたのである。そのために宇宙全体、歴史の全体を視野に入れる輪廻転生の思想それも唯識論を作品の骨格として選んでゐるのである。第三巻晩の寺によつてみると、大乘仏教の龍樹を祖とする中観派と並立した唯識論を選びとつてゐるやうである。即ち阿頼耶識を根柢に据ゑて森羅万象を説明する。一切は阿頼耶識から生じ、そこへと歸つてゆき、また再び生じるといつたことを果しなく繰返してゆくといふものである。ここに「豊饒の海」四巻は各巻ごとに時代と背景と環境の異なる独立した物語として完結しながら、それぞれの主人公が歴史の流れとともに輪廻転生の不可

思議な縁で繋がるというように一個人としての在り様を越えた空間的時間的な座標の外へ漂い出すといふことになるのである。かくて川端の感動し驚喜する三島の「豊饒の海」においては輪廻転生の思想は作品の骨格である。云ひかへればわれわれの時代の世界観を根柢から揺がし叩き潰し得ると三島が確信し、その生涯をかけて行き着かざるを得なかつた輪廻転生の思想そのものが作品化されていると云つてよいのである。三島の輪廻転生の思想への関心は「豊饒の海について」で述べるごとく「仮面の告白」以来断続的に続いてゐると云つてもよく又「花ざかりの森」の現世と前世とを自由に往き來する「白馬の幻」をみる心を生々と甦らせ続けて來たのがその生涯であると云つてもよいのである。三島においては輪廻転生の思想はその文学的出发点より種々の様相をとり、明滅しつつ「豊饒の海」に迄登りつめて明確な形をとるに至つたと云つてよからう。

この三島の輪廻転生の思想について考ふべきことは、これが現前するところの時代の自然科学的事象に照応する根柢、いひかへれば科学の作り出す時代に依拠をもつ、少くともそれに対する強い関心の下にあるといふことである。虚無の中に漂ふ地球、詳しく云へば水爆といふ巨大な力を獲得し、註四、「いまや存続絶滅を自由にできる立場から人間が地球を見てをり、加へて宇宙飛行士といふ特殊な人間に限られてゐるとはいへ、とにかく人間の肉眼が、地球の人間の肉眼が地球の外、宇宙の暗黒の側から地球を見たといふ事実の意味である。もつともいまでは水爆戦争や宇宙飛行に熱狂する空氣は消え、現代的事態の一つに納つてゐるが、しかし如何にさうだと云つても、人間が自分の力の内に、自分の肉眼の内に、地球をすつぽり捉へたといふのは人類の歴史上初めてのことであつて、われわれの上に何か重大な変化をもたらしたのではないか。科学技術によつて人間は己が力に目覚め、その極限へとひたすら突き進んで來たがいまや一つの限界を突き破り、從來とは違つた世間へ出てしまつたのではないか。宇宙の暗黒にぽつかり浮んでゐる地球を、生身の人間が肉眼で見えてしまつたのであり、その地球を掌の中の卵のやうにちよつと力を入れるだけで潰してしまふことができる」と知つてゐるのである。」といふことの上に、端的に云へば「美しい星」において語られる宇宙の雛型たる「虚無の風穴」、——ここに

三島の輪廻転生の思想が深く根を張つてゐる——「われわれが生きてゐるのは暗黒の虚無の宇宙においてだといふ痛切な自覚」の上に立つてゐる、といふことである。

さてこの自然科学の作り出す時代に触発されしかも時代の科学思想に根柢をもつといふことは川端においても明らかに見られるのである。幼時既に両親に死別し幼少時代に肉身親戚の者の多くを相ついで失ひ^{註五}「葬式の名人」とも云はれねばならなかつた彼はその貧弱な肉体とともに常に死に密着してゐたのであり、時代は地球冷却説が真面目に論争され、その地球上では第一次世界大戦で多数の人間が悲惨な死に見舞はれ、目前には関東大震災の惨状目を蓋ふものがあつたのである。川端はその東京の大災害の跡を水とビスケツトで幾日も彷徨してゐる。かくては彼の関心事は否応なく死の超克であらねばならぬ。

「文芸時代」の創刊号の創刊の辞に

古き世に於て宗教が人生及び民衆の上に占めた位置を来るべき新しき世に於ては文芸が占めるであらう。

我々の祖先が墓石の下にその屍を埋め西方浄土の永生を信じて安らいだやうに、我々の子孫は文芸の殿堂の中に人間不滅の解決を見出して死を超越するであらう。この雑誌はその殿堂に行く遙々遠い道の一枚の鋪石である。

と述べて死の超克、人間を死から救済するための文学たることを志してゐる。ここには前述の如く、彼自身並に己を圍繞する社会の現実と共に地球冷却説などの科学思想によつて醸し出される人類破滅の危惧への深い関心があると云はねばならない。そしてこれがが作品化してゐるのは、松翁道話の一節を殆んど書き写したやうな「精霊祭」の一節である。これは「抒情歌」に再度取り入れられることになるのであるが

今此様に物を云ふたり見たりしてゐるが、いつの間にやら虚空へ這入つて消えてしまふかと思ふと、又虚空から出て見たり聞いたりしてゐる。どちらが本間ぢや知れたものぢやない。ぢやから色即是空、空是即色と云ふのである。

所詮人に成り通しにもなれず、虚空になり通しでもあらぬ。してみればつまらぬものはこの骸ぢや。夫も知らずいかに自由が出来るとて厚顔しい、俺が骸ぢや俺が家ぢや

と、うそ恥しくもなうよう云へたものぢや。其やうな寝木け者の目を覚してやらん……

と云ふやうな道話の引用である。ここに既に輪廻転生の仏説への傾斜を見ることが出来る。そして又「文章倶楽部」に「永生不滅」といふ文を書いて

個人の死から人間を救出するには個人と個人、一人の人間と外界の万物との境界線を曖昧に暈すことが一番いいらしい。それなら種族の死から人間を救出には人間族と他種族、人間と猿、人間と鳥、人間と鳳蝶、更に進んで人間と植物、人間と無生物、人間と水のやうな液体、人間と空気のやうな気体との境界線を曖昧に暈すことが一番いいであらうか。

と云ふときは、これはまだ一応萬物一如の思想に止まつてゐるやうであるが、しかし「抒情歌」にいたると明らかに輪廻転生の思想と一体となつてゐるのである。それは

科学者は物質を造るものともいふべきものをこまかくたづねてゆけばゆくほど、そのものは萬物の間を流転すると知らねばならなくなつたではあませんか。この世で形を失ふものの香かあの世の物質を形づくるといふのも科学思想の象徴の歌に過ぎません。物質のもとや力が不滅であるのに、知性浅い若い女の私の半生でさへさうれずにゐられませんでした魂の力だけが滅びると、なぜ考へなければならぬのでありませう。魂といふ言葉は天地萬物を流れる力の一つの形容詞に過ぎないではありませんまいか。

といひ又

釈迦は輪廻の絆より解説して涅槃の不退転に入れと、衆生に説いてゐられるのでありますから、転生をくりかへしてゆかねばならぬ魂はまた迷へる哀れな魂なのであります。せうけれど、輪廻転生の教へど豊かな夢を織りこんだおときはなははこの世にないと私は思はれます。人間がつくつた一番美しい愛の抒情詩だと思はれます。

かうして死人のあなたに向つてよりも、私の目の前の早咲きの蕾をも持つ紅梅に、あなたが生れかはつていらつしやるといふおときはなをこしらへ、その床の間の紅梅に向つての方がどんなにうれしうかわかりません。なにも目の前の名の知れた花でなくて、もよろしいのです。フランスのやうな遠い国の、名知らぬ山の名知らぬ花にあなたが生れかはつていらつしやうと思つて、その花にものいひかけるにしてもおなじなのです。

とあるのを見るときは、明らかに科学思想に影響されて輪廻転生の説が真正

面から取扱はれてゐるといつてよいであらう。これは空に動く灯」にもまた

この輪廻転生の説は昔、来生で蓮の花に乗つかる為に此世で善根を積まねばならぬ。蛇に生れ変わるなどいふ風に坊さんの御説教の道具にされてゐたやうだがね。誰かが新しい生命を吹きこんで真理にしてくれるといいんだがな。物質科学的にも精神科学的にも証明してくれるとね。

と書き、この「空に動く灯」にふれて 註大 文芸春秋に

とにかく自分はこの輪廻転生の説が宇宙の神秘をすつかり明けひろげるための唯一の鍵だとも思ひ兼ねるが、これまでの人類が持った思想のうちでは最も美しいものの一つだと思ふのだ、最初は靈魂の上のこととして信じられてゐたが物質科学の進歩やその他で迷信と云つたことになった。その代りに却て物質界では科学的に実証を得る結果を招いたと云つてもよからう。物質の輪廻転生と云ふ言葉は少々可笑しいがその言葉のうちに含まれてゐる流動、融通、不滅なその気持だ。物質は流れる。私の小指の先の一細胞は全宇宙に向つて流れてゐると云つてそんなにでたらめではないのだ。靈魂上の輪廻転生説だつて、今日迷信と断定し得るとは云へなからう。

と云ふときには、おそらく質量不滅の法則の発見をも踏まへてゐるものと云ひ得るであらう。かく見てくるならば川端においても三島と同じく、科学思想に触発されつつ科学の作り出す時代に根を深くはつて輪廻転生の思想が真正面から語られてゐるのを見るのである。この点川端と三島は相似のものを持つてゐると云はねばならない。

(二)

又ここに繰返して云へば「空に動く灯」に

あの世を信じて安らかにこの世を去る人がある。これは死に対する意識的反抗だ。しかし人間を守つて死と戦つてゐる騎士は本能的だから無意識的な場合もあるが人類存続の信念だ。この種族存続の信念が人間感、地球滅亡の日には役立たなくなる。どうすればいいかつて君はいふだらう。しかし僕はそんなことは心配しやしないさ。なぜかと言ふと現在の種族存続感に代るべき信心が必ずその日までに人間に出来てくると思つてゐるからね。その信心が何だと思ふ。歸つて細君に聞いて見給へ。そして君の細

君までがだよ、その返事をし得る時代がくる前の日に、さつき話した輪廻転生の説を焼野に咲く一輪の花のやうに可愛からねばなるまいよ。人間がペンギン鳥や月見草に生れ変るといふのではなくて、月見草と人間が一つのものだといふことになれば一層好都合だがね。

とあるのを見れば、彼の生い立ちや体格、彼を囲繞する世情によつてもわかるごとく明らかに死への関心、死の超克基盤にしつつ彼の輪廻転生の説は作品に具象化してくるのである。死に対する切実さが輪廻転生へと昇華するのである。この点三島においても同様なことがみられる。それは「金閣寺」において、

この世に私と金閣との共通の危難のあることが私を上げました。美と私とを結合媒立が見つかったのだ。私を拒絶し、私を疎外しているように思われたものとの間に、橋かけられたと私は感じた。私を焼き亡ぼす火は金閣をも焼き亡ぼすだろうという考えは私をほとんど酔わせたのである。同じ禍い、同じ不吉な火の運命の下で、金閣と私の住む世界は同一の次元に属することになった。

とあり、それが終戦によつて

金閣と私の関係は絶たれたんだと私は考えた。これで私と金閣と同じ世界に住んでゐるという夢想は崩れた。またもとのもとよりもつと望みのない事態がはじまる。美がそこにおり、私はこちらにゐるといふ事態。この世のつづくかきり渝らぬ事態……敗戦は私にとつては、こうした絶望の体験に他ならなかつた。

と書いてゐるのを見て「仮面の告白」に

戦争がわれわれに妙に感傷的な成長の仕方を教えた。それは二十代で人生を断ち切つて考へることだつた。それから先は一切考へないことだつた。人生といふものがふしぎに身軽なものにわれわれには思はれた。ちやうど二十代までで区切られた生の鹹湖が、いきほひ塩分が濃くなつて浮身を容易にしたやうなものだ。

と書き、「私の遍歴時代」に

そのころ私は大学に進学してをり、いつ赤紙が来るかわからない状態にあつた。私一人の生死が占ひがたいばかりか、日本の明日の運命が占ひがたいその一時期は、自分の一個の終末観と、時代と社会全部の終末観とが完全に適合一致したまれに見る時代であつたといへる。

と書いてゐるのを見ると、三島が正に死と共にあることによつて、未来からの解放を信じ現実の限界を越えて、憧れ、夢想、官能を力の限り高く上りつめることが出来たのであることがわかる。ここに彼は

ほんとうに稀なことであるが、今もなお、人はけがれない白馬の幻をみることはないではない。祖先はそんな人を求めていた。徐々に祖先はその人のなかに住まふやうになるだろう。ここにいみじくも高貴な、共同生活がいとどちを有つのである。それ以来祖先は、その人のなかの真実と壁を接して住むやうになる。

と云ふときは、時代とか個人の枠を抜けて憧れに導かれるままに彼方へ過去へと自在に往き来する「白馬の幻を見る」人となり、ここに輪廻転生の思想と係はつてゆくことになる。かくて三島も亦強い死への親しみの下に輪廻転生の考へに立ち至つてゐると云つてよく、川端と相似のものをここにも見るのである。

三島はその文学的生涯の初期に於て死に親しみつつ輪廻転生の思想の作品化の萌芽をそだてはじめ、終戦によつて手痛い挫折を経験しながらも徹底的に自己改造を試みつつ、その最終の段階としての「豊饒の海」に登り着き彼の輪廻転生思想そのものと真正面から取り組みこれの文学化作品化を試みるに至り、その作品の一応の完成とともにあの衝撃的な死に至るのである。川端においてはその文学的生涯の初期、文壇に華やかに登場し、多彩にしてエネルギー豊かな活動をした「抒情歌」あたりまでに、輪廻転生の思想は、死とともに真正面から取り扱はれて、露はに作品に出てゐるのは前述のとほりである。終戦は註七「国破れてこのかた一入木枯にさらされる僕の骨は寒天に碎けるやうである。」と彼に於ても身にこたへ、註八「敗戦後の私は日本古来の悲しみのなかに帰つて行くばかりである」として以後輪廻転生の思想は明確な、露はな形をとつて作品の表面にあらはれることなく、例へば「あなたはどこにおいでなのでせうか」に始まり、また終る「しぐれ」三部作等に輪廻転生のかすかな残り香を感じしめる様に作品の奥深く沈潜して、流れつづけノーベル賞受賞記念の講演「美しい日本の私」に至るのである。明恵上人の宗教哲学の思索をする心と、月が微妙に相応じ相交る、「雲を出でて我にともなふ冬の月風や身にしむ雪やつめたき」といふ和歌にはじまる講演の最後を飾る言葉として、述べられ

るのであるが、明恵上人の西行法師との歌物語を弟子喜海の明恵伝より引用し西行法師常に来りて物語して言はく、我が歌を読むは遙かに尋常に異なり。花ほととぎす、月、雪すべての万物の興に向ひても、およそあらゆる相これ虚妄なること眼に遮り、耳に満てり。また読み出すところの言句は皆これ真言にあらずや、花を読むも実には花と思ふことなく月を詠すれども実には月と思はず。ただこの如くして、縁に随ひ読みおくとくとなり。紅虹たなびけば虚空色どれるに似たり。白日かやけば虚空明らかなるに似たり。しかれども、虚空は本明らかなるものにあらず。また色どれるにもあらず。我またこの虚空の如くなる心の上において、種々の風情を色どるといへども更に蹤跡なし。この歌即ち是れ如来の真の形体なり。

日本、あるひは東洋の「虚空」、無はここにも言ひあてられてゐます。私の作品を虚無と言ふ評家がありますが、西洋流のニヒリズムといふ言葉はあてはまりません。心の根本がらがふと思つてゐます。

と言ふとき、三島の阿頼耶識に相当する虚無が語られてゐるのを見るのであるが、これを見ても川端においても輪廻転生の思想はその生涯を貫いて流れてゐると云つてもよからう。そして最後に、斬新な手法で、愛の深淵をうかがい、独特の観想を語つて展開が注目された「たんぽぽ」を未完に残し「仏界易入魔界難入」——これは「美しい日本の私」にも一休の言葉として出てゐる——の謎をわれわれにおぼろのままにして突然の死に至るのである。これによりこれをみれば三島と川端はその作品におけるあらはれ方が終始正に逆になるとはいへ、その文学的生涯には輪廻転生の思想とともにするものがあつたことは云はれうるし、その至りついた果にあの虚空の彼方に、阿頼耶識の彼方に突如として飛沫を散らして流れ去つて行つてしまつたのである。

さて註九「小学校へ上るまでまともに米の飯が食べられなかつた」やうな虚弱な体質で、

註十 私が小学校へ行くのをいやがると、朝あけた雨戸をまたしめて、村の子供達が私を呼んで罵つたり、雨戸に石をぶつかけたりするあひだ祖父も私といつしよに暗い家のなかでじつとすくんでゐた。

といふ祖父の下での周囲から隔絶された生活「十六歳の日記」にみられるやうに、北条泰時の家系を誇る病身の祖父とのたつた二人きりの生活に幼年時

代を送つた川端と、^{註十一}二階で育てるのは危険だという口実の下に生れて四十九日目に母の手から祖母、この若年寄永井玄蕃頭の係娘の祖母の病室で、度々自家中毒をおこしながら、よほど天氣のよい日でない限り戸外へは出されず、三人の年上の女の子とママゴトや積木をして遊ぶといった周囲から全く隔絶された世界に幼少年時代を送つた三島とは奇しくも全くその環境を同一にしてゐるやうに見られる。しかもその上既にこの少年時代に川端も三島も文学の花を開かしてゐるのである。それも前述の如く同じ様に死に触発されて輪廻転生の思想にとりつかれながらである。それにもかかはらず、その文学における結実の仕方、あらはれ方の様相が終始正に逆になつたのは如何なる理由によるのであらうか。これが考察は次回にゆずらねばならない。

———
(未完)